様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　８ 月 ２９ 日現在

機関番号：４３９１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００６６９

研究課題名（和文）モダリティ表現を中心に日本人英語の語用論的特徴を同定する国際英語論的研究

研究課題名（英文）EIL Research on pragmatic features of Japanese English with modality expressions

研究代表者
小宮　富子（KOMIYA, TOMIKO）

岡崎女子短期大学・現代ビジネス学科・教授

研究者番号：４０２０５５１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は日本人英語における主観性（モダリティ）の表れ方に焦点を当て、学習段階及び習熟段階における日本人英語の文法・語用論的特徴を分析し、日本人英語に持続的に見られる日本的モダリティ表現を抽出して、日本人英語の独自特徴を同定することであった。本研究では、日本人英語を国際的なコーパスを用いて比較した上で、英語原書とその和訳書の対照を通して、日本人英語のI thinkの多用傾向の特徴を認知言語学的視点から分析することにより、日本人の英語使用において日本語のモダリティ表現を英語に投影しようとする傾向が一つの特徴であることを明示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は日本人英語の諸特徴の内、特にモダリティ表現に焦点を当て、日本語の感性が日本人の英語使用にどのような影響を与えているかの分析を行った。特に日本語の「と思う」の概念的意味用法と発話態度モダリティの区別を意識することなく、I thinkの概念的意味用法をモダリティ的に使用していることが日本人がI thinkを多用する原因であることが判明した。日本的対人配慮が日本人の英語に影響を及ぼしていることを明示しえた点に本研究の学術的意義がある。また、そのような日本人英語の特徴が日本人の自己表現にとって必然性を持つものであることを国際英語論の視点から主張しうる点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to analyze the grammatical and pragmatic characteristics of Japanese English at the learning and proficiency stages, focusing on the expression of subjectivity (modality), and to identify the unique characteristics of Japanese English by extracting the influence of Japanese modality expressions that persist in Japanese English. In this study, by contrasting Japanese English with the English original and its Japanese translation, we analyzed the characteristics of Japanese English to overuse I think from a cognitive-linguistic perspective. As a result, we found that one of the characteristics of Japanese English is the tendency to project Japanese modality expressions into English.

研究分野：日英語比較

キーワード：国際英語論　日本人英語の特徴　モダリティ　コーパス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は科学研究費基盤研究（C)「日本人英語への肯定的認識を学習者の国際発信力につなぐ国際英語教育」（代表者小宮富子、課題番号 26370718、平成 26 年度～28 年度）の発展的研究として位置づけられる。同研究では、①日本文化を反映した日本人英語の特徴の分析、②国際英語論への肯定的認識と英語使用への積極的態度との相関性などの確認を行った。しかし①において「日英語のモダリティの差が日本人英語に与える影響」に特化した研究はなされていない。本研究では、「日本語と英語は『主観性＝モダリティ』の現れ方に根本的な相違がある」という認識を前提に、「習熟段階の日本人英語に見られる日本的な主観性の表れ」事例の分析が必要であると考えた。学習者コーパス ICNALE を用いた本グループの分析を通して様々な「緩衝表現」等を英語習熟者が多用している事実が確認されれば、日本的モダリティが日本人英語の特徴を作る要因の一つであることの確認が可能になると判断した。

２．研究の目的

本研究の目的は、１）日本人英語における「主観性＝モダリティ」の表れ方に焦点を当て、学習段階と習熟段階における、日本人英語の文法・語用論的特徴を比較し、「中間言語段階以降も日本人英語に持続的に見られる日本的モダリティ表現」を抽出すること、また２）国際英語論の観点から EC 圏に属するアジア諸英語との比較を通して、日本人英語の文法や語用論における独自特徴を同定することであった。

３．研究の方法

本研究は平成 30 年度から令和３年度までの４年間で実施し、1) 国際英語論における先行研究分析及び日本人英語の位置づけの確認, 2) The International Corpus Network of Asian Learners of English（ICNALE）の written 版及び spoken 版を用いた他のアジア諸国の英語学習者の英語と日本人英語との比較、3) 習熟段階・学習段階の日本人英語使用者（高校教員・大学生）による英語エッセイの分析 4) 英語書籍（一般書）とその日本語訳書の比較を通したモダリティ表現（特にＩ think と「と思う」）の比較、などを通して日本人英語のモダリティ表現の特性の抽出を目指した。

1) 国際英語論における先行研究分析及び日本人英語の位置づけの確認：国際英語論研究の近年の動向を分析し、国際英語理論の中で日本人英語がどのような位置づけを持ちうるかについての分析を行った。国際英語論の先行研究の分析については研究分担者の吉川が、国際英語論における日本人英語の位置づけや研究動向の分析については主に研究代表者の小宮が担当した。

2) 日本語や日本文化の特性に関する先行研究の確認：文化の視点から日本語の世界観が日本語の文法や語用論的特性にどのように反映しているかに関する確認作業と整理を行った。この作業は主として小宮が担当した。日本人の言語感覚の基底にある「対人意識」や「主観性」が日本語の文法や語用論的特徴にどのように反映しているかの確認を行った。英語との対比で見た日本語の特性としては、主題優位言語であること、「ウチ・ソト」の対立で周囲を捉える傾向があること、客観世界よりも「世間」へと引き寄せた言語表現を好むこと、「わきまえ」という共通感覚への感受性が文法の根幹に存在すること、様々な言語レベルで「曖昧さ」を肯定していること、などが挙げられる。英語が「原因結果関係」を基軸として世界を語るのに対し、日本語は「主観性と共感性」の表出に重きを置いている。このような言語感覚の違いが日本人の英語使用にも影響を与えていることが想定される結果となった。

3)日本人英語のモダリティ表現の分析：日本語の論理や感性と英語の論理や感性の違いが端的に現われる領域として、両言語におけるモダリティ（主観性）の現れ方がある。日本人英語の語用論的特徴の一つとして日本語のモダリティの影響が日本人の英語使用に現れる事例の分析を行った。分析に際しては、石川（2016）における学習者コーパス ICNALE を用いた分析から、日本人英語学習者と香港・中国の英語学習者の英語使用傾向に顕著な相違があるとされるものを用いることとし、中でも I think の多用が香港や中国の英語使用者より日本の英語使用者に顕著である現象に焦点を当てた。

本研究では「I think の多用が日本語の『と思う』表現の影響による日本人英語特有の傾向である」という仮説を立て、英語母語話者による I think の使用と日本語における「と思う」の使用の認知言語学的な相違の分析を通して、日本人英語における I think 多用の心理的背景と多用がもたらす日本人英語への影響についての分析を試みた。

4)「と思う」と「I think」の機能の認知言語学的比較に基づく出現状況の分析：湯本（2004）が示す「と思う」表現の 3 機能のうち、特に概念的意味と発話態度モダリティの区別に焦点を当て、英語原著とその日本語訳書を対照し、対応する思考表現の出現数や認知言語学的視点から見

た２機能の現れ方の確認と分析を行った。標本として使用した英語原文内での思考表現の出現数が 84 件であったのに対し、日本語対訳書での「と思う」表現の出現数は 112 件であり、とりわけ、対応する英文に思考表現が無いのに日本語訳に「思う」が現れる文例が全体の 25%を占めていることから、「と思う」が I think のような概念的意味ではなく発話態度モダリティとしての機能を前景化して使用される例が多いことを確認した。さらに、「と思う」を含む訳文を翻訳ソフトを用いて再度英文に訳出すると、多くの場合が I think へと再翻訳されてしまうことを確認し、日本人が I think を多用するメカニズムをシミュレートする結果となった。例えば

（1）a．My friend will understand.
b.友達は分かってくれると思います。
c．I think my friend will understand.

において（1a）は原文の表現であり、思考表現が現れていないが、訳文では（1b）のように「と思います」が出現した。この文を翻訳ソフトで再度英訳したものが(1c)であり、原文にはなかった I think が出現する。英語原文にはなかった思考表現が「と思います」として出てくるのは、「と思います」が「おそらく」などの蓋然性に近い発話モダリティ表現として使われているためである。日本人がその想いを英語で表現しようとする際に I think を使用する傾向が高くなる。つまり英語母語話者が（1a）を用いる傾向があるのに対し、日本人英語話者は(1c)を用いる傾向が強くなる。問題は(1a)と（1c）に意味的な相違があり（1b）と（1c）にも意味のズレが生じることである。ズレの原因は(1b)の「と思います」がモダリティ表現であるのに対し、(1c)の I think が概念的意味であることによる。日本人英語の I think の多用が時に冗長な印象を与える原因は概念的意味機能と発話モダリティ機能の混同に起因するというのが本調査の結論である。

４．研究成果

１）日本人英語の諸特徴

①発話量の少なさ：学習者コーパス ICNALE-spoken を用いて日本人の口語英語使用を英語母語話者や、アジア諸国の非母語話者英語の特徴と比較した結果、1 分間における英語母語話者の発話量の平均が 153.28 語、Outer Circle（ESL）圏に属するアジア人大学生が 126.4～145.58 語、Expanding Circle(EFL)圏に属するアジア人大学生の発話量が 65.53～111.04 語であったのに対し、日本人大学生の英語発話量の平均が 69.28 語で、韓国につぐ語数の少なさが判明した。

②意味限定の弱さ：日本の高校教員による英語エッセイや日本人大学生の英語エッセイの分析から、高コンテクスト言語である日本語を反映した英語使用の結果として、情報の意味的な限定不足が生じる傾向があること、特定化を避けた漠然とした英語表現が頻出することが判明した。

③主体の曖昧さ：英語が本質的に直線的な原因結果関係や因果関係の明示を基本とするのに対し、日本語では主体の明確化が必ずしも絶対要件ではないところに、日本人による英語エッセイの課題が生じている。特に大学生の英語エッセイにおいては主体の曖昧さとともに行為の対象や行為の結果についての認識の曖昧さなどが見られることが判明した。

④発話態度モダリティ表現の多用：日本語は共感性を重視する言語であり、「ね・よ・だ」等の終助詞を共感表現として多用するが、英語ではむしろ「呼称」を多用するなど,日英語の共感表現には相違がある。日本人大学生の英文エッセイの分析では、日本語の終助詞の機能を英語の付加疑問表現に置き換えて表現しようとする傾向が見られた。また、英語の習熟度に関わらず、日本人英語使用者が I think を多用する傾向があることが石川の研究から明確となった。その知見をベースに I think の多用の背景に日本語の発話モダリティ機能を I think に投影しようとする傾向が存在している可能性が示された。

２)国際英語論における日本人英語の捉え方：上記研究の詳細については「I think の多用に見る日本語モダリティの日本人英語への影響」（小宮富子、2020）で発表し、日本人英語の I think の多用は日本的モダリティ表現の自然な現れであり、時に冗長性が感じられるにせよ、日本人英語話者にとっては自然な自己表出として肯定されるべきものであることを論じた。

３）英語学習への示唆：モダリティ表現に焦点を当てた日本人英語の語用論的特徴としては、日本語の hedge 機能や対人配慮を英語に投影しながら表現する傾向があるということである。本来モダリティ表現ではない I think をモダリティに準えて使用する傾向があることは、日本人英語の特徴として受容されていくべきであると本研究グループは主張するものである。しかし、一方で、英語助動詞の使用においても日本人特有の傾向があり、日本人大学生は can、may、must を多用する一方で would、could の使用が少ないことを石川（2012）が指摘している。本研究から想定される次なる仮説として、日本人英語における would, could の少用と I think の多用との間に逆対応関係があるのではないかということである。英語学習への示唆としては「と思う」の発話モダリティを英語で表現したいと感じる場合には、I think だけでなく、would, could などの助動詞をもっと活用する方向への指導が有効であると思われた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小宮富子	４．巻 18
２．論文標題 I thinkの多用に見る日本語モダリティの日本人英語への影響	５．発行年 2020年
３．雑誌名 JACET中部支部紀要	６．最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石川有香	４．巻 1
２．論文標題 日本人大学院生による工学系英語論文の言語特徴ーアブストラクトの分析	５．発行年 2019年
３．雑誌名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会予稿集	６．最初と最後の頁 180-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川有香	４．巻 436
２．論文標題 工学英語論文要旨の談話構造ー高額5分野の国際誌の要旨の分析	５．発行年 2020年
３．雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート	６．最初と最後の頁 10-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yuka Ishikawa	４．巻 1
２．論文標題 A Corpus-based Study on Frequent Noun Phrases in Engineering Academic Texts	５．発行年 2018年
３．雑誌名 PROCEEDINGS OF THE 4TH ASIA PACIFIC CORPUS LINGUISTICS CONFERENCE (APCLC 2018)	６．最初と最後の頁 174-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川有香	４．巻 425
２．論文標題 日本人工学英語学習者による修士論文英文要旨の言語特徴	５．発行年 2019年
３．雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート 425 ESP・JSP教育のためのテキスト分析手法	６．最初と最後の頁 55-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　8件）

１．発表者名 小宮富子
２．発表標題 Society5.0時代の多文化共生と英語教育
３．学会等名 大学英語教育学会中部支部秋季定例研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 小宮富子
２．発表標題 日本語モダリティを反映する日本人英語の特徴と評価
３．学会等名 JAAL in JACET（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 小宮富子
２．発表標題 日英語比較を通して見えてくるもの
３．学会等名 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉川寛
２．発表標題 DALPmodelによる英語変種の評価
３．学会等名 JAALinJACET（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉川寛
２．発表標題 日本の多言語社会化で生じる問題と英語の役割
３．学会等名 JACET中部支部春季定例研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 石川有香
２．発表標題 A Corpus-based Study of Research Article Abstracts in Engineering
３．学会等名 International Symposium on Applied Linguistics Research（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 石川有香
２．発表標題 A Comparative Study on Gender Representation in English Textbooks Used in Japan and Korea: A New Approach to Analysis of Gender Representation
３．学会等名 Korea Association of Teachers of English (KATE)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 小宮富子
２．発表標題 英語教育現場におけるＥＬＦと評価
３．学会等名 大学英語教育学会第58回国際大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小宮富子、吉川寛
２．発表標題 汎用性重視の評価と観点別評価の関係
３．学会等名 ＪＡＡＬin JACET学術交流会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小宮富子、吉川寛、石川有香
２．発表標題 Reassessment of English Writings of Japanese ELF Users Based on the DALP Model
３．学会等名 The 11th international Conference of English as a Lingua Franca（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小宮富子、吉川寛、石川有香
２．発表標題 Modality Expressions in Japanese English Reassessed from the viewpoint of English as a Lingua Franca
３．学会等名 The 2nd International Conference of Bilingualism（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石川　有香 (ISHIKAWA YUKA) (40341226)	名古屋工業大学・工学（系）研究科（研究院）・教授 (13903)	
研究分担者	吉川　寛 (YOSHIKAWA HIROSHI) (90301639)	中京大学・公私立大学の部局等・特任研究員 (33908)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関